

---

# エメラルドの聖杯

及川葉月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エメラルドの聖杯

### 【Nコード】

N0153Q

### 【作者名】

及川葉月

### 【あらすじ】

大阪で起こった死体遺棄事件。被害者の身元を引き受けてもらうため、大阪府警は兵庫県警に協力を申し出でる。「雨霽月朦朧之夜」地獄帝国首都・ジュテツカの中心部に聳え立つパンデモニウムの深層部「コキユートス」で幽閉されるルシファーが覚醒する「地獄の黙示録」他ノ短編集

## 吉備津の釜（前書き）

某有名掲示板にて一度掲載した作品を編集したものです。

## 吉備津の釜

深夜二十三時過ぎ。月は漆黒の雲に隠れ、街灯もないせいで道筋を照らすものはなく、兵庫県加古川市、志方町の高砂市との市境にある高御位山の山麓には一軒家が点在し、周辺は文字通り闇と化していた。

母屋から少し離れた広い庭の片隅にある納戸へと向かう磯山ゆたかは、「近頃は物騒で女の霊がここ周辺に蔓延って男の魂を吸い取る」と友人の言った胡散臭い下らない話を、未だ舌に残っている茄子の鳴焼きの味で思い出していた。

？お前の母親が化けて出てきて、あの男を呪い殺したら、少しは、楽になるんじゃないのかと思うけどな？

友人はそう言って酒を飲み、そのときゆたかは曖昧に笑って、今でも充分楽になった。と答えた。

楽になったのには理由があった。

納戸の戸を閉める鍵代わりに使っている心棒を外し、立て付けの悪い木製の引き戸を戸袋に向かって引いた。手にしていた懐中電灯を耳の横、目線の高さまで上げ、埃っぽい小屋の中に光を照らした。

カビ臭い中には使わなくなったものを収納しているダンボールに混じって、男が一人壁にもたれ込んで座っていた。人相からして五十代半ば。手首、足首はロープで縛られ、口にはガムテープが貼られている。随分長いあいだ、この狭くて暗い部屋に閉じ込められていたからか、体力的にも精神的に衰弱して、些か痩せたように見え

る。

「あなた、もう一人子供いるんだったよな」

そう言っつてゆたかは敷居の上でしゃがみ、眩しいくらいの光をわざと男の目に向けた。男は抵抗すら出来ないのか、ぐったりとして僅かに眉間にシワを寄せるぐらいで、特に目立った反応はしなかった。

「器用な奴だよな。嫁さんの他にもう一人女作るなんて。まあ、嫁の方捨てたわけだから、そう器用な奴でもないのか。あなたみたいな奴、昔からいい死に方ないって相場が決まってるんだって。俺としては良い死に方ってなんだよって思うけど。まあ、あれだな。死に方に当たりはないけど、ハズレはあるってことか」

不気味に笑うゆたかは、ジーンズの尻ポケットに突っ込んでいた折りたたみ式のナイフを取り出した。刃を伸ばし、その先端を男に向ける。

「刺して殺しちゃおうかなって思ったんだけど、もつと嫌な死に方ないですかね」

まるで通りすがりの人に道を聞いているような言い方だった。あるわけないだろ、と言いたいところだが、既に何時間も監禁された男は最早、殺してくれといった気持ちが行先し、何の反応もなければ反抗もなかった。

「もう殺すから言うけど、あなたの家つてこのあいだ放火されたでしょ？ 今、どう生活してるか知らないけど、あれ、やったのって俺なんですよ」

話すだけ話したゆたかはスツと立ち上がり、男の傍に寄った。ただぼうつとした様子で男の目の前に立ちはだかり、しばらくじっとしていたかと思えば、またしゃがみ込んだ。男は目をギョロギョロとさせて拳動不審となり、ゆたかは酷く落ち着いた様子で男の口に貼ったガムテープを剥がした。

「何か言うことは？」

そう言っただけゆたかは、もう最期だから遺言ぐらい聞いてあげますよ。と抑揚のない声で訊いた。しかしそのあとゲラゲラと嘲笑を浮かべて、「しょうもないこと言ったら殴るけど」と加えた。

何も言わない男を前にゆたかは無言のまま立ち上がり、またしばらくじっとしていた。羽織っている豹柄のパーカのポケットに手を入れ、偉そうに出で立ちで男を見下す。長い溜め息をつき、次の瞬間、エンジンブーツのつま先で男の顔をまるでサッカーボールかのように蹴倒した。

弾け飛ぶように男は身体を地面に叩きつけられ、ゆたかはうつぶせになった男の後頭部を思いっきり踏んだ。そして煙草でも踏み消すかのように踏み潰している。

「なんでお前が生きてるんだよ」

荒い怒鳴り声を上げるゆたかの表情はまるで般若のように歪んでいた。そのあと、ゆたかは目の前の男の顔、腹、背中に凄惨な暴力を加えながら怒鳴り続けた。

男は口から血を吐き出し、助けを求めようにも声が出ず、耐える

しかなかった。というより、男は元々ゆたかに抵抗の意思すら持っていないかった。

「ゆたか……」

それが、父親が息子を呼んだ最初で最後の声だった。

手が震える。持っていただけで使わなかった簡易ナイフを両手で握り締め、静かに息を吐いて、すつと息を吸った。

仰向けになった男の腰に跨ったゆたかは、頭上まで上げたナイフを一気に男の胸部へと振り落とした。それと同時に全体重を頼りないナイフに預けて、グツと力を入れ、ナイフの先端がゆっくりと中へと入り込み、同時に耳障りで粘着質な軋む音が、鼓膜に響いた。

刃の根元までねじ込んだナイフを一気に引くと、まるで蛇口の栓を壊して噴射する水のように血飛沫が上がった。

ゆたかの全身に鮮血が掛かり、男の身体にも降りかかった。

息が上がる。肩の力が抜ける。震えが止まる。手にべっとりついた紅い液体が気持ち悪くて自分が何をしたのか、改めて実感し、頬が緩んだ。

「静香……。これから何か、変わるかな」

ゆたかの独り言のような小さい声に反応した、小屋の外壁にもたれかかる友人、安藤静香は、中を覗くこともせず、吸っていた煙草の紫煙を吐いた。

「変えていけばいいよ」

静香の返しに、ゆたかは小さく、頷いた。



## 捜査会議

\* \* \*

大阪府警察此花署の一室のドアに「大阪市此花区このはなく 無職・男性死体遺棄事件」と戒名が貼られ、中では、本署から出づ張ってきた捜査一課の人間も交えて捜査会議が行なわれていた。

「十一月八日。午前八時二十分に此花署へ、大阪湾に浮かぶ水死体が発見されたと通報が入り、検死の結果、死体は胸部を有尖片刃器ゆうせんかたはきで刺殺されたあと、両手首と両足首に重りを繋いだ縄を縛られ、大阪湾に投げ込まれたと視ています」

会議室前方の席に座る捜査一課の重鎮が、部屋の最後尾から二番目の席に座っている本店の捜査一課の上原巡査部長に「被害者の身元は」と聞いた。上原は起立し、調査で収集した被害者の情報を説明した。

「被害者は熊田曜輔。五十六歳。現在は兵庫県あまがさき尼崎市在住。殺害されたとされる十月二十五日以降から既に彼を見た近隣住民はいません。熊田には結婚歴はありませんが、三十二歳の頃に、当時二十七歳の女性、磯山あいかと事実婚の関係にあつたそうです。尚、磯山あいかには、父親が熊田曜輔と見られる子供がいますが、熊田は認知していません」

「その内縁関係にあつた人物とその子供の身元は」

「磯山あいかは出産した半年後に亡くなっています。現在、磯山あ

いかの子息、磯山ゆたかは兵庫県加古川市に在住していると情報が入ってます」

重鎮は立ち上がり、「兵庫県警からの協力を要請し、調査に入る」と言い、起立。と号令を掛けた。一斉に捜査員が立ち上がり、礼をして捜査会議が終わった。

会議室を出て此花署の廊下を歩きながら欠伸をする上原に、後ろから鑑識課の池田警部補が、しゃきつとしろ、と声を掛けた。振り返りながらも足を進め、なんか変な事件ですよ。と声を落とす。

「そうかあ？ 水死体なんてよくあるけどな」と池田。

「じゃなくて、事件の当事者ですよ。女性に殺されてもおかしくないような人だと思いませんか？ 入籍してないし、子供認知しないし、そもそも無職だし。色々と性格的っていうか人間的に問題があった人だと思っし、殺されても当然だと思っんですけど」

「俺もそう思っ」

まさかの同意に二人は揃ってため息をついた。こんな人間の死体が浮上し、それを発見してしまったが故に始まった死体遺棄事件。仕事が億劫になる。

池田は何かを思い出したように、取り敢えず兵庫県警に任せるしかないな、と話を変える。「本店に連絡するんか？」。

「さあ。所轄で良いんじゃないですか。そんな凶悪でもないし」

「じゃあ……、加古川署、か？」

妙なところで区切るのは理由があり、それを上原は察した。池田は「なら個人的に電話掛けた方が早いんじゃないかねえの」と言うが、上原としては「番号知らないんですよ」となんか面倒臭そうだった。

「え、本気で言ってるの？」と素で驚く池田。「あんなに仲良かったのに」。

「なんかそう言われると気色悪い」

「加古川ってどこだっけ」

「高砂の隣です」

「あそこらへんって確か加古郡とかって言ったな。播磨はりまの国って」

「なんでそんなこと知ってて場所知らねえんだよ」

憎まれ口のような言い方でそう返す上原の頭をド突き、電話よろしく。と奴さんを追い越して池田はさっさと廊下を歩いて行った。上原は拗ねたような表情を浮かべ、携帯を手にとって加古川署へと連絡を入れた。

「磯山」と表札とある、広い武家屋敷のような平屋は、ここ周辺で一番敷地面積が広く目立つため、初めてここに訪れた兵庫県警加古川署 刑事課・強行犯係所属の巡查部長、舞紀まゐのは頼りのメモを見比べ、「あ、ここですね」と早い段階で磯山の家を見つけた。二つ年上の上司、国家公務員の菅原警部が横からメモを見て眉間にシワを寄せる。

「これ、誰が描いたんですか？」

菅原の問いに舞紀の聲が、えっ？ と上擦る。あたしですけど……。と自信なさ気に返すと奴さんはふと笑って「今度から僕が描きますよ」と肩を叩かれた。つまりは、

「下手つてことですか……」

「人住んでんのか怪しいところですねえ」

もう相手にしていなかった。

仕切りなおして二人は半開きになっていいる門扉を開け、石畳のアプローチを歩いてアルコーブに立った。お金持ちなのかな、と呟きながら舞紀は今どきガラス障子の玄関周辺にあるはずであるインターホンを押そうとした。だが、その肝心のインターホンが見当たらなかった。

「古い家ですし、つけてないんじゃないですか？」

菅原の言った通りのようだ。

あ、そうか。と納得した舞紀は、すみませーん。と、引き戸を叩いた。洋式のドアではないために雑な音が響く。

しばらくして内側からその引き戸を開けたのは若い男だった。二十代前半といったところか、顔立ちの綺麗な美人だった。

警察二人は一礼し、「ちょっといいですか？」と、ほぼ同時に警察手帳を提示した。相手の表情は至って真顔で、何か用ですか？と完全に警戒態勢に入っている。

「磯山ゆたかさんはご在宅ですか？」

「磯山は今仕事に行ってますけど」そう答え、相手は右手首に装着している時計を見た。時刻は十九時四十九分。「あと三十分くらいで帰って来ますよ」

「お名前聞いてもよろしいですか？」と菅原。

「安藤ですけど」

「下の名前は？」

「静香」

女性みtainな名前ですね、と軽い口調で呟く菅原に静香は「あんに言われたくないですよ」と、眉間にシワを寄せた。さっき警察

手帳を提示したとき、静香は菅原の下の名前、「禄弥<sup>としみ</sup>」を見逃さなかったみたいだ。

静香の返しも意に介さず、菅原は「磯山さんとはどういった関係ですか？」と話を続行させていた。

「……友達ですけど」

妙な間があったことに菅原は気付いたようだ。相槌がぎこちなくなり、そうですか。と半ば棒読みになった。

「磯山に何か用ですか？」

「磯山さんの父親の遺体が大阪のほうで発見されたみたいなんです」

舞紀が言った。言い方こそ死体ではなく、百円でも拾ったような口吻だ。

「父親？ 磯山は私生児ですよ。父親は認知していないはずですからその人が父親とは断定出来ないんじゃないですか」

「ええ。なのでDNA検査したいんです」

「なんで？」

静香の顔が崩れた瞬間だった。この場に及んで舞紀も「そういえばなんでですか」と上司に顔を向けた。

「ファックスに書いてましたよ」

柔らかい口吻だった。だが些か棘があった。

「読んでないです」

素直に自供する舞紀。

「被害者には身寄りがいまさんから、遺骨の引き取り先を探すために息子さんを探してくれて、府警から要請が来たんです」

そう言った菅原の視線が静香に移った。はあ……。と静香の返答が曖昧になり、それだけですか？ と訝しげだった。

「いえ。おそらく府警は、大阪で発見された時点で此花区の税金で葬式あげなきゃならないのを免れるために意地でも身寄りを探してるんです。僕らはその府警のパシリというか、府警の脅迫を免れるために息子さんを探しているだけです」

菅原が本心を打ち明けた。静香が溜め息を漏らす。まあ、そんなことだとは思ってましたけど、と会って数分で警察の胸中を読んだみたいだった。舞紀は、良いんですか？ そんなこと言って。と懸念していたが。

「息子を見つける為なら手段選ぶな言われたんです。隠しても仕方ないし、そもそも上原さんに、息子見つからなかったらお前こそ大阪湾に沈めるからな、って脅されたんですよ、僕は。もう後に引けないんです」

上司が後悔しているところだが、確か、上原は菅原の部下ではなかったか、と舞紀は疑問を抱いた。部下を恐れる国家公務員。やはり叩き上げに比べて現場回数が少ないエリート組は上司でありなが

らも肩身の狭い思いをするのか。

「磯山さんが帰って来るまで中で待たせてもらって良いですか？」

話を变えた舞紀が聞いた。静香は少し反応が鈍った後、良いですけど。と二人を中に通すことを承諾した。



## 化粧る

案内されたのは縁側に面した四畳半ほどの広さがある和室だった。正方形の足の低いテーブルがあり、四つ座布団が常備されている。さっきまで静香がここにいたのか、部屋の片隅に置かれた世界の亀山モデル・アクオスにはフォックスチャンネルが流れ、テーブルの上にある灰皿には吸殻が三本あった。内一本は未だ薄っすらと煙を流している。

菅原と舞紀はそのテーブルを前に並んで横に座り、静香が向かい側に一人で座った。

「煙草、吸われるんですか？」と菅原。

「ええ、まあ。あ、吸いますか？」

ああ、いえ。と断る菅原は一拍間を置き、磯山さんは仕事は何なさってるんですか？ と早々、本題に入った。静香は火の後始末が出来ていない煙草を灰皿の表面にもみ消しながら、販売員ですなと返した。

「神戸の大丸で化粧品売ってますよ」

そう言っつて静香はファッション雑誌などでも特集を組まれるほど有名な化粧品ブランドの名を挙げた。そこに反応したのは舞紀だけで、菅原は気の抜けた表情を浮かべ、ああそうなんですか。と納得したフリをした。

「販売員って確か社割とかあるんですよね」

舞紀が訊くと静香は少し笑って「でも磯山は男ですからあんまり関係ないですけどね」と柔らかい口調で返した。

「洗顔料とかはそのブランドのもの使ってるみたいですけど。客に商品の説明することがあるので自分で使った方が早いって言って基礎化粧品とかだと新製品は持って帰ってきてますね。あ、サンプルありますか？」

舞紀が言うが早いか、静香は立ち上がって襖を開けて隣の部屋へと出て行った。舞紀は「いいんですか？」とまるで子供のような嬉々とした声をあげる。少し離れた場所から、「いいですよ。勝手に配ってくれて言われてるんで」と返ってきた。

「美人な人ですよね」

ふいに菅原に顔を向けて舞紀が言った。だが、ボーっとしていたのか、菅原の返事は、ああ、うん、まあ、そう、ですね。と歯切れが悪かった。

「緊張してるんですか？」

「緊張もしてますけど、なんか変じゃないですか？」

「え？もしかして整形？」

「違います」

菅原は静香が未だ戻ってこないかと襖の方を一瞥したあと、「友達の家がないのにその友達の家にいるって、ちょっと変だと思う

んですけど」と舞紀に耳打ちした。

「ああ、そっか。もしかしてもっと複雑な関係なんじゃないですか？ 説明するのが面倒臭いから、友達って言っただけとか」

「なら親戚とかの方が未だ説得力あるでしょ。というか複雑な関係ってなんですか」

「友達の友達」

「それ他人ですよ」

ああそうか。と納得する舞紀の元へ静香が戻ってきた。磯山が働いているブランドの紙袋を胸に抱えている。

さっき座っていた場所に座り、「取り敢えず一通り渡しておきますね」と、化粧水、乳液、メイク落としクレンザー、美容液の試供品を各々二つずつ並べ、更に「色白いですね」と舞紀の顔を伺って一番明るいオークルのパウダーとリキッドのサンプルファンデーションを付け加えた。それを、商品を買わなければ貰えない小さい紙袋に詰め、どうぞ。と舞紀に差し出す。彼女の喜びようはお菓子をもらった子供みたいだ。

「随分、手馴れてますね」

菅原が言った。そういえば安藤さんは何なさってるんですかと続け、しばらく使っていなかった営業用の笑みを向けた。その一連を見た後、静香は「大学生です」と答えた。

「販売員じゃなく？」

「磯山の影響ですよ」

「そういえば、なんで安藤さんが磯山さんの家にいるんですか？  
本人いないのに」

その確信をつくような質問に、静香は、ああ。と相槌に似た返事を打ったが、二拍ほど間があいたあとに「一緒に住んでるんですよ」と答えた。誤魔化そうとしたのか、言葉を選んだかまでは分からない。

「じゃあ同居し、」

途端、縁側に面した和室の障子が開いたことよって舞紀の音が妨げられた。三人が同時に縁側の方へ振り向く。そこにいた、外側から開けたのは長身瘦躯の若い男だった。静香と同一年くらいの二十代前半といったところか、整った目鼻立ちは線の細い安藤と違って些か男らしい印象を与える。

「誰？」

その男、危険につき。

「誰？」

当然といえば当然か、男は自分を見ている見知らぬ男女に声を掛けた。菅原と舞紀は慌てたように立ち上がり、一礼して「兵庫県警の者です」と挨拶した。

「警察？」

一種異様の表情を浮かべた男は、静香を一瞥した。それが何を示すかは分からないが、途端、表情は険しくなつて「何かあったんですか？」と県警二人に聞く。

「あ、もしかして磯山ゆたかさんですか？」

呑気な口調で舞紀が訊くと、相手は当惑気味に、そうですけど……と返事した。続けて菅原が「ちよつと時間いいですか？」と聞いた。

釈然としないゆたかは曖昧な相槌を打ちながら静香の横に座り、県警の二人も同時に座った。

「この方、ご存知ですか」

菅原が鞆から取り出した一枚の写真をテーブルに置き、ゆたかに提示した。写真の人物は府警が追っている事件の被害者、熊田曜輔だ。

「いえ、知りませんが……」

「磯山さんの父親と思われる方です。磯山さんの母親は磯山あいかさんですよね」

「そうですね……」

「あいかさんはこの方と事実婚だったそうなのでこの方が確実に磯山さんの父親という確信はないんですが、遺体を引き取ってもらいたいのでDNA検査させて頂けませんか」

「遺体？ 僕がこの人の遺体を引き取るんですか？」

「そのために府警は犯人探しより必死なので」

抑揚のない声で話す菅原とは違い、ゆたかは血相抱えて、嫌ですよ、そんなの。と怒鳴りに近い声で返した。その迫力に舞紀が引けをとる。

「ですが、原則として遺体は身内の方が引き取ることになってるの  
で」

「身内って、仮にその男が俺の父親だとしても、その男は母と入籍していないし、俺を自分の子供だって認知していないんですよ。他人じゃないですか」

「ええ、存じております。ですが府警は維持でも区の予算で火葬したくないみたいなんです。府警としては死体をもう一回沈めてなかったことにしたいくらい」

酷い温度差の二人だった。菅原の熱弁（？）が伝わったのか、ゆたかから焦燥感が消え、落ち着いた低い声で「とにかく、役所に行つて下さい」と言い切っていた。

「関係ないですよ、うちは」

「その割には随分、気に障ってますね」

菅原の鋭い一言に、言葉が詰まった。関係ないと言いながら怒るというのは、矛盾しているのだろうか。

「父は、母を捨てたんです」

低い声で落としたゆたかの声は、その場にいた全員を凍りつかせた。

「祖母から父の話は聞いてたんです。昔から女癖が悪くって。それでも最初は母と上手くいって母のお腹に僕が出来たみたいですけど、僕が生まれる前に父は外で女作って、拳句に母を騙して一千万奪って別の女と逃げたんです。母は最期まで父を恨んで、体調を崩してそのまま亡くなったんです。母を裏切ったんですよ、あの男は。どうしてそんな奴の遺骨を俺が引き受けなきゃいけないんですかっ」

声が室内に響き、こればかりは菅原も府警の要望を通すことは出来なかった。

沈黙が続き、息をする音さえも耳につく。

「帰って下さい」

毅然としたゆたかの態度に、菅原は小さく溜め息をついた。

「堀さん」

「えっ？ あ、はいっ」と舞紀。

「帰りましょう」

二人は座布団の脇においた荷物を抱え、静香とゆたかに会釈し、大人しくこの部屋を出て行こうとする。静香は、お送りしましょうか、と妙な気を使っているが、大丈夫ですよ。と菅原は慇懃な態度で交わし、舞紀と玄関に向かった。

「お邪魔しました」

三和土たたきで靴を履き、ガラス障子を開閉して外に出る。普段、ビジネス街の一角で仕事しているためか、周りにコンビニや自販機すらもない、「のどか」とは聞こえの良い僻地は空気が新鮮で、菅原はため息をついた。

「あら、お庭広いですね、ここ」

舞紀が玄関右手の入り組んだ庭の方を眺めていた。菅原は、そうなんですか？ と舞紀の後ろからその庭を覗く。庭にはおそろく広い。

確かに広いですねえ、と呟く菅原の声が不自然に途切れた。

「どうしたんですか？」



「あれ、なんですかね」

あれ？ と繰り返す舞紀は菅原が見ている方向へと視線を集中させた。ここから何メートル先にあったものは入母屋屋根の木造建築の建物。随分、小さく見えているので舞紀は、井戸？ と呟いた。

「納戸じゃないでしょうか」

そう言った菅原は、ちよつと行ってみましょう、と提言する。勝手に良いんですか？ と舞紀は止めたが聞く耳を持つてくれなかった。

取り残されたくないため、舞紀は菅原の後を続いた。幸い、今日の午後から振る雨に備えて庭に面している縁側は雨戸が閉められ、住人から庭に侵入した警察二人の存在はばれなかった。

「あ、本当だ。物置小屋ですね」

広過ぎる庭の片隅に置かれたその物置は作りが頼りなくて、色んなところが腐朽していた。「百人乗ったら壊れるでしょうね」と真剣に言う菅原。納戸に百人乗る状況ってどんなだと些か疑問に思う舞紀。

いつ住人に勝手に庭に入ったのかばれるのが怖くて内心冷や冷やしている舞紀を他所に、菅原はえらく冷静な態度だった。「あ」と声を落として何かを見つけ、利き手にだけダークスーツの内ポケットから取り出した手袋を装着し、しゃがんでその見つけたものを手に取っている。

「なんですか？」

菅原は見つけたのは、なんてことはない、単なる煙草の吸殻だった。

「戻りましょうか」

途端、立ち上がって菅原が言う。中見ないんですか？ と聞いた舞紀の質問にも答えず、行きますよ。と手袋を外しながら既に踵を返し、玄関先へと向かって行った。大人しそうなタイプに見えるが案外、身勝手な部分もあるらしい。

舞紀は菅原の後を追いかけて、その場を後にした。

天気予報が大幅に外れ、午後十三時の時間帯には不似合いな煙色の空が土砂降りの雨を降らし、気温は十一度という、一月並の気温を記録した。

兵庫県警加古川署の刑事課のフロア中央に強行犯係に配属される職員がデスクがたまっており、出入り口から二番目のデスクに座る菅原は大阪府警からの電話を受け取った。相手は大阪府警にいた頃、一緒に仕事をした上原だ。相変わらず眠たそうな声だった。

「また寝てないんですか？」

「映画観てた」

「帰り道にツタヤがあるっていいですよ。僕のところ薬局しかないんですよ」

「それはそれで便利だと思うけど」

「何借りたんですか？ 南極料理人？ クヒオ大佐？ ゴールデン・スランバー？」

「多重人格少女の映画。ホラーだけど」

「解離性同一性障害なら実際、見たことあるでしょうよ」

「このあいだ池田さんが兵庫県のこと播磨って言ってるさ、なんか兵庫県の舞台にした話を使った映画あったなあって」

「兵庫県舞台って結構あると思いますけど。雨月物語とか」

「あ、それだ」

まさかの明答に上原は、その雨月なんとかって結局どういう話なんだ、と菅原に聞いた。菅原は受話器を肩に挟み、パソコンのキーボードを叩きながら説明する。話している内容と打ち込んでいる内容は全く違う。一度に別々のことが出来るらしい。

「古い話ですよ。二百年以上も前ですから。上田秋成っていう本業医者が書いた短編小説なんです。その中の話にある「吉備津の釜」が確か、今の加古川市を舞台にした話だったと思いますよ。女癖の悪い男が「磯良いしな」って名前の綺麗な女と結婚して、家庭を築くんですけど、結局、男の女癖の悪さは直らなくて遊女の袖って女と一緒にするために磯良を騙して逃げたんですよ。それで磯良は嫉妬に狂って最後まで男を恨んで死に、最終的にはその男は化けて出てきた磯良に殺されるっていう顛末です」

「いつの時代も女は怖いってことか」

「男がアホなんですよ」

あ、そうか。と納得する上原は話を戻し、息子はどうなったんだと聞いた。菅原のキーボードを打つ手が止まり、受話器を左手に持ち直した。

「会いましたよ。でもまあ、依然と遺体は引き取らないって言って

ます。また行けば今度はDNA鑑定くらいしてくれるとは思いますが」

「けどなんか妙じゃね？ その息子」

上原の疑問に「戸籍上何の関係もない人ですしね。全く記憶になんていくら血縁関係であつても他人レベルじゃないですか。怒つて当然ですよ」と答ええるが、いや違う。と否定された。「どうということですか？」。

「磯山あいかは磯山ゆたかを出産した半年後に亡くなつてる、熊田は磯山あいかが子供を出産する前に別の女と逃げてるんだろ？ だとしたら磯山ゆたかが熊田を憎む理由つてなんだ？」

「それは……、自分の母親を捨てたからじゃないんですか？」

「母親が生後半年の子供に自分は男に捨てられたなんて話すのか？」

上原の見解としては、「磯山ゆたかは何度か熊田曜輔に会つてい」ということだった。ならば「知らない」と言つたのは嘘となる。

「なんでわざわざそんなことを……」

「磯山ゆたかが熊田を殺害したに違いない」

毛羽立った声を張る上原は途端「まあ、取り敢えず容疑者と会つてカマかけるしかないんじゃないの。頑張れ、エリート。負けるな、キヤリア。ファイトだ、国家公務員」と適当なエール(?)を送つて電話を切っていた。

## 舞月

褒められているんだが馬鹿にされているんだが釈然としないエールで完全にやる気を喪失した菅原は静かに受話器を電話機に戻し、長大息をついた。傍から見ればかなり落ち込んでいる人に見える。

「どうしたんですか？」

それを食堂からフロアに戻ってきた舞紀に見られていた。

「あ、お帰り。さっき府警から電話きたんですけど、もう一回、磯山ゆたかに会うように言われたので今から神戸向かいますから準備して下さい」

「え？ どうしてですか？」

「容疑者だからですけど」

何故テレビの映りが悪いのかと聞かれて、アナログだからですけど。と答えたような口吻だった。そんなことは一切聞いていない舞紀の声にならない声が喉から漏れる。地味な驚き方だ。本当に動揺している人は声が出ないのか。

「容疑者に被害者の遺体引き取れって言ったんですか？」

「いくら府警だって戸籍上、何の関係もない奴に遺体を引き取れなんて言いませんよ。裁判起こされたら困りますしね」

非常に穏やかな口調で説明する菅原だったが、昨日の磯山に対す

る態度が全て演技だったと考えると舞紀の全身に鳥肌がたった。「じゃああれって嘘だったんですか？」

「当然ですよ」

「なんで言ってくれないんですか……」

「上司に言われたんです。堀さんに言ったら絶対失敗するって」

否定出来なかった。

ああそうですか、と溜め息と共に落ち込みを消化する舞紀は「けどいくら戸籍上関係ないからってなんで子供が父親を殺すのかな」と疑問を口にした。横でトレンチコートを羽織る菅原が「殺す人は殺しますよ」とえらく明るい声で答える。

「現に親殺しっていう事件だって起きてますし、逆に親が子供を殺す事件なんて頻繁に起きてるじゃないですか」

「でも仮に磯山さんが熊田を殺したとしたら、理由はなんなんですよ  
うか」

「理由？」

「被害者は息子の磯山ゆたかさんが生まれる前に内縁の妻である磯山あいかと別れているから、そのあとに生まれた息子さんと熊田には何の接点もないですよ。それだと殺す理由がないってことになりませんか」

途中まで上原が言っていたことと同じだが、最後が真逆に分かれ

た。一度会っていると考えるべきか、矢張り磯山には関係ないとされる殺人事件か。

「堀さん」

「はい？」

「道を歩いていたとき、その道でお婆さんが蹲ってたらどうしますか」

突拍子のない質問だった。さっきまでの話は終わったのかと当惑しながら、一応声かけます。と素直に答えた。

「普通はそうしますよね。或いは無視するか、けどそれは一般論です。世の中には、そのお婆さんに殴り掛かる人間だっているんですよ」

菅原の真剣な目つきに、言いたいことを察した。

「理解を超える理由ってことですか？」

「被疑者の殺害動機を理解しようとしても、僕たちが納得出来るはずもありません。考えても分からないことは分からないで良いですから」

そう言っただけ菅原は舞紀の私物であるダウンジャケットを手渡し、受け取ったと確認すると手を離れた。行きますよ、と一人先にフロアを出る。舞紀は上着を羽織りながら後を追いかけた。

「どこ行くんですか？」



「磯山さんの職場です」

神戸市中央区に所在する大丸神戸支店一階のトアロード南玄関に入った直ぐ左手に、磯山ゆたかが働いているコスメブランドのカウンターがあった。既に二十代の女性客がテストターのコスメを取り、販売員から話を聞いて購入を考えているようだった。平日でも十五時にもなると客が減ることはないようだ。

「いた、いた」

菅原が見つけたブラックスーツにノータイの格好の磯山ゆたかは、バースツールに腰を掛け、ライトアップされたシンプルなデザインのレストランに向かい合っている女性客に話しかけながらも真剣な顔つきで化粧を施している最中だった。

「ああいう仕事って女性しかしないとってたんですけど、I K K Oとか」と舞紀。

「I K K Oはおっさんですよ」

「あのお客さんの接客が終わったら声掛けますか？」

自分が言ったことを誤魔化すように舞紀が言った。菅原はそれに関心せず、そうですね。と同意し、二人は出入り口前に置かれている無意味とも思われるチェアに腰を掛けて様子を伺っていた。

「やっぱり普段から良い化粧品使ってるから肌綺麗ですよ、磯山さ

ん

「そんなところまで見てたんですか。どうせだから化粧品買ってくださいます？ 僕、待ってますよ」

「ああ、サンプル使ったんですけど、なんか肌に合わなくて。っていうか、菅原さんの肌も綺麗ですよ。もしかしてそのブランド使ってるんですか？」

「水洗いです」

食器でも洗うような言い方だった。

水洗いでそんなに肌理の細かい絹肌が手に入るならと今日から肌は水洗いだと妙な決意を固めた舞紀を他所に菅原は、行ましようと立ち上がった。遅れた舞紀が先々と歩く菅原を追いかける。

「磯山さん」

店頭でさっきまで接客していた女性客に頭を下げ、持ち場に戻ろうとしたゆたかを舞紀が呼んだ。奴さんは振り返り、一礼した兵庫県警二人に「ああ、刑事さん」と小さい声を上げる。

「お時間よろしいですか」

聞いている割には疑問符がついていない口吻で菅原が言うと、ゆたかは引けていく様子のないカウンター周辺を見渡し、ちよつと待ってて下さい。と告げ、その場を離れた。レジ台に立っている化粧の濃い女性店員に何かを言ったあと、会釈してまた戻ってきた。

「じつち来て下さい」

二人にそう言ってゆたかは持ち場を離れた。どこへ行くのか、警察二人はお互い顔を見合わせたあと、大人しくゆたかのあとをついて歩いた。

案内されたのは関係者のみが立ち入りを許可されている社員食堂だった。節電という名目で十三時を過ぎると電気五十%が削減されて室内は薄暗い。最も、外の悪天候の影響というのもあるのだろうが。

窓際奥の四人席に案内され、菅原と舞紀が隣同士に座り、ゆたかが向かい側に座った。

「関係者以外が入っても大丈夫なんですか？」と舞紀。

「ああ、大丈夫ですよ。年末に向けてバイト雇うとなったら面接はここでするんで。それに、カウンターで話し込んでもお客様の迷惑になりますし」

妙に棘のある言い方だった。思わず「すみません。職場にまで押し掛けて」と謝罪を申し上げる。

「構いませんよ。あ、何か飲みますか？」

そう言ってゆたかが立ち上がると、菅原が落ち着いた様子で「ああ、結構ですよ。お金掛かりますし」と申した。

「飲み物はタダですから。といってもコーヒーしかないんですけど」

持つてきますね、と席を立ち、奥の厨房カウンターへと向かう磯山の姿を目で追うのは、菅原と舞紀だけではなく、遅めのお昼ご飯を食べている従業員にもいた。そこを歩くだけで視線を奪う。容姿に恵まれた人間の特権だろうが、どうも磯山は外見だけでなく、身にまとう雰囲気注目浴びる大きな原因かもしれない。

「何訊くつもりなんですか？」

舞紀の問いかけに反応しない菅原。目は合っているが答えようとしていない。

「またあたしに言うなって上司に言われたんですか？」

「上司命令ですよ。警察は縦社会ですから」

「そつえば菅原さん、なんであたしに敬語なんですか？ 年上なのに」

「敬語はクセなんです。あと、僕は年上ですけど、職歴は堀さんの方が二年長いですよ」

巡查として五年の実務経験がなければ巡查部長に昇進出来ない地方公務員と、試験に合格すれば既に警部補の地位に就く国家公務員の差というのか。

ああそうなんですか。と妙な納得をした舞紀は、でも本当に敬語とか使わなくていいですよ。と言った。菅原はふと笑って「努力します」と返した。

人数分のコーヒーをトレーに載せた磯山ゆたかが戻ってきた。「

それで、何が聞きたいんですか」と二人にコーヒーを差し出し、席に着いた。

「僕らが来た意味、分かりますよね？」

## 暗雲

「僕らが来た意味、分かりますよね？」

コーヒーに一目もくれず、菅原が言った。

ブラックコーヒー飲もうとしたゆたかの手が止まる。

飲む前にカップをソーサーに戻したゆたかは、落ち着いた声色で「また遺体を引き取れって言うんですか？」と話す。僅かに声が震えている。緊張しているのか。

「いえ、今回はちょっと磯山さんに聞きたいことがあって来たんです」

「聞きたいこと？」

ふいに、ゆたかの視線が手元のカップから菅原に向いた。

「磯山さんは煙草吸われますか？」

「煙草？」

「ええ」

「煙草は吸いませんが、それが何か？」

「いえ。個人的に気になったので」

ああそうですか、としか言いようがない質問だった。

「話は変わるんですけど、磯山さんは先月の二十五日の夜、どこで何をしていたかお聞きしたいんですけど」

やっとブラックコーヒーを一口飲んだあと、二十五日ですか？と聞き返した。ええ。と菅原は口の端上げている。

しばらく利き手を口元に当てて考え込み、そのあと視線を菅原に向けて「多分、家にいたと思いますけど」と答えた。

「安藤さんも一緒にでしたか？」

分からないくらいに、ゆたかの手が機敏に動いた。

「いたと思いますけど」

「二十六日の朝は何してらしたんですか？」

「朝？ 仕事行きましたけど」

「本当に？」

「本当につて？」

「ここに来る前に店の店長さんに電話で聞いたら磯山さんは、二十六日は十三時に出勤されていたそうですけど」

「その日は遅番だったんです」



「じゃあ朝は何を？」

「寝てたんじゃないですか。半月も前のことなんて覚えてませんよ」

沈黙。周りの席に座る社員の声が鮮明に聞こえてくる。

「そうですか」

溜め息と同時に声を発して沈黙をやぶった菅原は、椅子の背もたれにもたれかかった。そして腹筋を使ってふんぞり返った姿勢を直し、「すみません。お時間取らせてしまって」と頭を下げた。

「もう良いんですか？」と、ゆたか。

「ええ。結局、府警は区の予算で火葬することになったので」

「そうですか……」

声を落とし、俯く寸前、ゆたかの目を見た舞紀の背筋に、何か冷たいものが走った。

特に虹彩の色が珍しいわけでもない。真っ黒の日本人特有の目。目つきが悪いわけでもない。特別大きいわけでもない。これといって特徴のある目ではなかった。

ただ、目が合った瞬間にぞっとした。

「なんならDNA検査だけでもなさいますか？」

舞紀の寒気など気付いていない菅原が言った。冗談とも取れる言

い方で、ゆたかはふと笑って、遠慮しておきます。と答えた。そのあと、小さく溜め息をついた。

「やっぱり職場にお伺いしたのはご迷惑でしたよね」

菅原の言葉に一拍間をおいたゆたかは慌てたように、ああ違うんですよ。と笑った。警察が家に来た時点で職場にも来るかもしれないと覚悟はあった。だがそれは敢えて言わずに隠し、「ちよっと昔のこと思い出して」と嘘をついた。

「母が亡くなったあと、僕は母の両親、祖父母に引き取られたんです。祖父母から聞いた話だと、母は父と出会った頃、二十五歳で、それまで異性との交際経験がなかったみたいなんです。きつと、焦りもあつたんでしょね。だから悪い男に捕まっただんだと思います。熊田は、僕の父親に間違いないです」

諭すような口調でそう話すゆたかに菅原は、そうですか、と声を落とし、席を立った。遅れて舞紀が立ち上がる。

「今日はありがとうございました。またお伺いしますので」

菅原がそう言い、県警二人は頭を下げた。もたもたとした仕草で荷物を手に取る舞紀に、落ち着いて。と妙な優しさを垣間見せる菅原。

席から離れ、食堂の出入り口へと向かい、完全に県警二人の姿が見えなくなつたところで、ゆたかはまたため息を吐いた。

本当は死体が浮上し、引き上げられて警察に見つかった時点で誤算だった。河川敷ではなく海に投げ捨てた死体が浮上するとは思わ

なかったのだ。

あと七年、死体が見つかなければ「行方不明者」となった熊田曜輔の戸籍は自動的に消えるはずだった。

また溜め息を吐き、目に掛かるほど長くなつた前髪をかきあげ、しばらくぼんやりとした。既に食堂のイートインスペースにはいつの間にか自分一人しか残っていない。

左手首に装着している腕時計は十六時七分を表示している。

そのとき、背広の内ポケットにしまっているドコモのスマートフォンが鳴り出した。取り出して手にとると、画面には「静香」と表示されていた。通話ボタンを押し、携帯を耳に当てた。

「あ、もしもし、ゆたか？ ごめん、仕事中に」

「どうした？」

「なんか、気分悪くて……。お前に何かあつたんじゃないかって」

何かあつた？ と心配そうに声を掛ける静香に対してゆたかの返事がなかった。

「もしもし？ ゆたか？」

「なあ、静香」

低い、張り詰めた声だった。無意識に静香の喉がつまり、声を失った。

「逃げよつか、どっか遠くに」

雨と気温で結露したガラスから見える空は陰鬱で、雨は時間ごとに強くなっている。

ここじゃないどこかは、雲ひとつない晴天に恵まれているのだろうか。

「いいよ、そうしても」

迷いのない静香の声に、喉の奥に痛みが走った。

遠くの空に稲妻が走り、落雷した。

## 雨模様

5

昨日の雨から尾を引き、雨こそ降っていないが午後の降水確率は午前に比べて跳ね上がり、十二時を過ぎた現在、外は雨模様で空気は湿り、不快指数は八十を超えていた。

加古川署の食堂から刑事課のフロアに戻ってきた舞紀がデスクに戻ろうとしたとき、窃盗犯係の先輩職員が彼女を呼んだ。

「大阪府警から届いたファックス、机に置いといたから」

「あ、本当ですか。ありがとうございます」

そうやって席に着き、デスクの上に置かれたファックス用紙を手にとると、へったくそな字で新しく入った情報が書かれていた。用紙の片隅に「上原様」と書いている。

舞紀の隣のデスクでは、携帯電話を肩に挟んで英語を話しながらパソコンのキーボードを打つ菅原がいた。このファックスはどちらかというと前に府警にいた菅原宛じゃないのか、と心底思った。

電話中に失礼と思いつながらも、舞紀はファックス用紙を菅原に差し出した。電話しながら舞紀を一瞥し、パソコンの手を止めてそれを受け取った菅原。

「訛りも文化なのに」

電話を切りながら菅原が言った。仕事中に何の話をしてたんだ。

「あ、上原さんからか。字が綺麗だから誰だか分からなかった」

「え？ それで？」思わず言った。

「前はもつと汚かったんですよ。ユーキャンでペン字習い始めたみたいですね」

舞紀は取り敢えず、そうなんですか、と相槌を打ってから「何書いてるんですか？」と話を変えた。菅原はデスクに置いたメガネを手に取り、それを掛けてから読み始める。

「梅田のクラブで働いている二十一歳女性が、熊田が殺される三ヶ月前に会ってみたいですね。テレビで事件のこと知って府警に連絡入れたって書いてます」

「話聞くとしたらわざわざ大阪に行かなきゃなんな、……だったら府警が聞き込みするはずですよ？ 元々は府警が担当してる事件なんだし」

もしかして経費ですらぼつたくり紛いの店にも行きたくないのかと猜疑していると、菅原が、あ。と声を上げた。

「この女の人が住んでる場所、神戸の灘区だ」

「あたしらが行けっことですか……」

「早いこと手え引いた方が良いかもしれませんね」

そう言って菅原が立ち上がった。どこ行くんですか？ と座ったままの舞紀が奴さんを見上げて聞く。だが当然のように、今からその女性の家行くんですよ、と返される。

「堀さんも出かける準備して下さい」

「ああ、はい」

慌てて席を立つ舞紀だったが、菅原は、その前にちょっとトイレ行ってきます。とフロアを出て行った。緊張感あるのかないのか分かったものじゃない。

菅原がトイレから戻り、二人は菅原が運転するトヨタのレクサスに乗って神戸市灘区へと向かった。上原が描いた分かりにくい女性宅への地図を頼りに行くと十分くらい迷い神戸ループを抜け出せないでいたが、結局カーナビに助けられて女の住むマンションへと辿り着いた。

「ここですね」

運転席から降り、ドアを閉めながらそのマンションを見上げる。外観はホテルのような出で立ちで、新築らしい。舞紀は目を大きくして「凄い大きいですねえ」と感動していたが、菅原は何の感動もないので先々と中へと入って行った。

自動ドアをくぐり、レセプションを過ぎて天上の高い、床が御影石のロビー奥にあるエレベーターに向かった。

「何階ですか」

「最上階の五号室です」

エレベーター横のボタンを押すと直ぐにドアが開いた。中に入り、菅原がドア付近に立って「閉」のボタンを押し、「18」のボタンを押した。ドアが閉まり、静かに上昇していった。

「あ、角部屋だ」

五号室手前に来て菅原が言う。「最近の若い人でも角部屋住めるんですね」とここに来て感動というか、感心していた。そこに舞紀が「水商売だから角部屋に住めるんですよ」と横入れする。

「水商売って給料良いんですか？」

「そりゃあ、普通にバイトしたり、あたしみたいに昼に働くよりは全然良いと思いますよ。まず時給が桁違いですし」

そういう店行かないんですか？ と訊いてみると、菅原は「だってお店行っただってみんな初対面の人だし、だったら友達とかとお酒飲んだ方が楽しくないですか？」と真面目に返していた。

「そもそもお酒ってあんまり得意じゃないんですよ」

そう言ってインターホンを押した菅原に、イメージ通りの人だな……。と舞紀がこぼした。ああそうですか？ と菅原が笑う。

「だあれー？」

インターホンから聞こえた声は、間抜けな鼻に掛かった女の声だった。言っちゃなんだかものすごくアホっぽい。



「あ、突然すみません。兵庫県警の者です」

「ああ、警察ー？ ちょっと待ってねえ、今開けるからあ」

受話器を置く音が聞こえ、県警二人は顔を見合した。もしかしてこういう事態を想定して府警は県警に彼女を任せただろうか。

「はい、どおぞー」

玄関を開けた女性は化粧をしていない素颜なのだろう。糸を引いたような細い目に、頬骨が浮き出た顔と骨格自体が大きい顔。それに比例して図体の面積が広い身体は、とてもじゃないが二人が想像していた夜の蝶とは大きく掛け離れていた。女性と男性を比べるのもなんだが、安藤静香の方が数倍も美人だ。

「失礼します」

突然のゴジラ到来によって自分が何をしに来たかすっ飛んだ舞紀は一秒の刹那に意識を取り戻し、何事もなかったかのように女性宅の家に入った。菅原の心臓は未だに別の意味でドキドキしていた。

## 証言

部屋は2LDKでキッチンはL字型。リビングダイニングが繋がっており、二人はリビングに案内され、足の低いテーブルを前に二人並んで座った。女性はオフホワイトのソファにどっかりと座っている。部屋の内装は可愛らしいのだが彼女自身は全くといっていいほど「可愛い」に掠りもしていない。

「あの、熊田曜輔さんについてお聞きしたいんですけど」

「ああ、パパあ？ 超良い人だったよお。服とかあ、化粧品とかあ、靴もバックも色々買ってくれてえ、同伴もしてくれてチップもくれたもん」

語尾を延ばすのが可愛いとでもキャバ嬢マニュアル(?)にでも書いていたのか。それか、これが彼女の素なのか。どっちにしろお客様の心を掴むどころか鷲掴みにして神経を逆撫でする喋り方だった。これが仕事でなければ「お前ぶつ飛ばすぞ」くらいの暴言を吐いていても可笑しくはない。

「熊田さんとは三ヶ月前に会ったのが最後ですか？」

それでも情報提供を呼びかけるために菅原が聞いた。舞紀は拳を握って怒りを鎮圧させるのに意識がいつているようで仕事にならない。こんなに同性に腹が立ったのは生まれて初めてだと痛感する。

「えーっと、あ、うん。八月で最後」

「それ以降にメールか電話でのやり取りはありましたか？」

「ちょっと待って」

そう言って彼女はテーブルの上に置いている携帯を手に取り、物凄く親指を早く動かして操作していた。「あ、うん。最後に来た次の日に営業メール送って返事がなかった」と、ちゃんと調べてくれたらしいが素直に感謝出来ない県警二人。

尼崎署からの情報では、熊田は十月に入った途端に姿を見た者はいなくなったという。

「あまり関係ないみたいですね」

そう言い、溜め息をつくことで怒りを緩和させる舞紀の横で、菅原が突如と黙り込んだ。どうかしたんですか？ と訪ねると、何か腑に落ちない様子で考え込んでいる。

「あの、すみません」

菅原の声掛けに、なあにー？ と癪に障ると気付いていない返答は、菅原を妙な気分にした。それは自分の脚を叩くことで解消する。

「同伴って出勤前に会うんですよね？ どこで会われてたんですか？」

「梅田だけど？ たまに地元で会うけどね」

「地元？ 神戸ですか？」

「大阪に比べたら未だ何もないけど、まあオーパも大丸あるし、ちよつと買い物するにはいいかなつて」

「オーパ行つて大丸行くんですか？」

「うん？ 変？ 大体オーパで服買つて大丸で化粧品買つてもらつてたけど」

県警二人の顔色が変わる。これで吉と出れば勝負に入れる。

「どこの化粧品ブランドを買われるんですか？」

女性から出た答えは、期待通りの答えだった。

熊田曜輔と磯山ゆたかは、一度は会っているようだ。

「そのとき接客した店員さん、覚えてますか？」

菅原が言つと女性は、甘ったれた声で、ちよつと待つて。と言い、一旦席を外した。どこへいくかといえはリビングを離れるわけではなく、壁際のラックに置いた小物入れからハガキを手に取り、戻つてきた。

「この人」

彼女が差し出したのは、そのコスメブランドの大丸神戸店から送られてくるダイレクトメールだった。裏に彼女の住所とあて先、店員の直筆によるキャンペーンの知らせが書かれている。

最後の一行、右端に「磯山」と名前があった。

県警二人は女性にそのダイレクトメールを借り、磯山から接客を受けたときに同伴していたのは間違いなく熊田曜輔だと改めて証言をとった。

喋り方さえどうにかすれば気さくなお姉ちゃんを通る女性に見送られ、マンションを後にした二人は、加古川署へ向かう車の中で話し合った。

「磯山さんと熊田が八月に会ってたとして、十月に熊田さんが事件に巻き込まれたってことですかね。約二ヶ月の期間はなんなんでしょうかね」

「殺人計画進行中だと思いますけど」

運転しながら菅原が言った。しかしそこで舞紀は「けど、どう考えても磯山さんには熊田を恨む理由がないんですよ」と声を張った。被疑者の殺害動機なんて理解しても意味がないと言われたばかりだが、どうも腑に落ちない。

「だって磯山さんは熊田に何もされてないんですよ？ 確かに、嫌う理由はあると思うんですけど、殺すまではいかなさと思うんですよね」

「堀さん」

普段より低い声だった。些か舞紀の返事が鈍る。

「雨月物語って知ってますか」

また突拍子のない質問だ。うげつ物語？ と聞き返してしまふ。

「神様のお告げを訊かずに女癖の悪い男と結婚した磯良が、結局裏切られてお金を騙し取って別の女と逃げたその男を自分が死んでから化け出てきて呪い殺す話です。その男と磯良に子供がいたかは分かりませんが、もしいたとすれば、子供は自分の母を捨てた父親を殺すと思いますか？」

レクサスが赤信号に引つ掛かって停車する。数十分前まで降りそうで降らなかった危うい天候だったが、移り変わって今はフロントガラスには容赦なく雨が叩き落されている。

「殺す人もいるかもしれないってことですか？」

「だとしたら、それは殺す理由になりませんか？」

青信号になったとき、菅原はアクセルを踏み込んだ。

## L a b i o s y L e n g u a

月のない夜空からは土砂降りの雨が降り続き、隙間なく閉めた雨戸を殴りつけるかのようにして吹き荒れる風が暴走する。何度も空に稲妻が走り、一面に光を帯びれば爆音を奏でて落雷する。

自然の共鳴は、火照った汗ばむ体が抱き合えば耳に入ってこなかった。鼓膜に響くのは、耳元で囁く静香の声と吐息、乱れた不規則な息遣いだけで、時々聞こえる掠れた声が更に愛欲を加速させる。人間らしい快楽を貪っている今、二人は体温がこもった毛布の中で口付けを交わし、蜜よりも甘い舌を絡めて寒さを凌いで、互いの濡れた身体を重ね合わせいた。

「明日、仕事じゃなかったっけ」

シーツの上でうつ伏せに寝転がり、煙草を吸う静かが、横で毛布にくるまって横になっているゆたかに聞いた。未だ愛撫の余韻が消えないのか、返事の声が掠れ、体はぐったりとしていた。

「午後出勤だから。そっちは」

「三限から。まあ、俺の場合は休んでも良いけど」

「起こすから」

そう言ってゆたかが笑う。静香に気を遣わせないために笑っているのだろうか、その笑い方は、気力のない空笑いに似ていた。

「なあ」

「ん？」

「なんで殺したの」

途端、それが引き金かのように大量の雨が降り出した。そのとき初めて静香が閉まりきっている襖に顔を向け、雨降ってたんだ。と悪天候に気付いた。

二時間前。ゆたかが殺害した熊田の遺体を、二人は大阪湾に遺棄した。浮上してこないように四肢に二十キロの錘をつけ、沈めた。

そのあいだゆたかは黙々と日産のティーダを運転し、助手席に座る静香は黙っていたため、必要最低限の話をしなかった。

「母親、自殺したんだ」

それは、静香でさえ初めて聞いたことだった。

「あの女、熊田の借金の肩代わりしたくせに俺を生んで半年で自殺したんだ。その借金は祖父母が返したけど、結構無理して働いたんだろうな。返し終わったら二人とも直ぐに亡くなった。本当は熊田のことなんてどうでも良かった。実際、あんな奴に引っ掛かった母親の方が嫌いだった。けどあの男は」

不自然に言葉を切ったゆたかはたどたどしい仕草で上半身を起こした。未だ静香に抱かれた感触が拭えないらしく、腰は未だ落ち着いたままで、静香に身を委ねるように寄り添った。

彼の口元から煙草を奪い、それを枕もとの灰皿でもみ消す。



「お前の母親と逃げておきながら、お前ら親子を捨てたたる」

空が一瞬明るくなり、近くで雷が落ちた。

三ヶ月前、水商売の女と職場に来た熊田自身、百貨店で働く息子の存在に気付いていたようだった。それから何度か帰りを待ち伏せされて話が見たいと声を掛けられたが、ゆたかは毅然と、話すことは何もない。と交わし続けた。しかしそれでも尚、熊田はつきまとい、仕方がなく話し合いに応じると向こうから静香の存在を打ち明けてきた。既にゆたかは静香と知り合っていたため、そこで異母兄弟だと知った。

「まさか自分の子供同士が既に知り合ってるなんて誰も思わないだろ。異母兄弟が世間体にも悪くないなら直接手を下さない方法で殺してもいいって言ったんだ。どうしてそこまでして俺に肩入れするのか直ぐ分かった。磯山の財産目当てだ。お前が俺の弟になれば、お前にも財産が入る。きつと熊田は、お前を殺したあと、俺を殺すつもりだった」

静香は、そっか。と言葉を落とし、姿勢を崩した。ゆたかをもう一度あお向けに寝かし、頬に指先を流す。

「なら、俺が熊田を殺してる」

そう言って静香は、ゆたかのだらしなくなった唇に自身の唇を重ね合わせ、舌を絡めあった。唾液が混じる音が耳に響く。舌が解け、唇を離すと舌先に唾液の糸が引く。途切れると、静香の口はゆたかの首元に食いかかった。愛咬を繰り返しながら、徐々に胸へ下腹部へと下がっていった。

## 残像

\* \* \*

神戸駅構内にある駅長室で交渉し終え、改札口付近の壁際に設けられた緑色の掲示板にポスターを貼る舞紀まゐのの横で、前に張っていた剥がしたポスターを繁々と見ながら「やくしまるえつこかあ」と呟く菅原に、舞紀は「なんで磯山さんが被疑者だって分かったんですか」と聞いたが、奴さんは全く耳を貸さずに「変わった歌ですよなえ」と独り言を続けていた。先輩の音楽の趣味がばれた瞬間だった。

「菅原さん」

「ポスター斜めになってますよ」

意外と興味ないことは手より口を出す奴だった。

「磯山さんのことですよ。いつから被疑者だって分かってたんですか？」

「家行つて話したときです」

「結構、最初から分かってたんですか……」

「だって僕は磯山さんに、府警は犯人を捜してる、って言ったんですよ。仮に聞き逃したとしても、遺体が発見されたと聞いたら、例え血の繋がりのない人間でも遺体を引き取れと言われた対象の死因くらい聞くはずですよ」

「ああ……。じゃあ、煙草の件は？」

「煙草の吸殻です」

「落ちてたやつですか？」

納戸周辺を調べたときに見つけた煙草の吸殻のことだ。

「仮にですけど、もし磯山さんがあの納戸で被害者を殺したと考えれば、その吸殻は磯山さんのものですけど、喫煙者でないなら、そこにいたのは共犯者。おそらく安藤さんです」

「どうせなら中も見ればよかったのに」

「あの人たちは何度も人を殺してるような人間じゃないですよ。少なくとも、被害者を殺すまでは品行方正な人間だったと思います。だからきつと常習犯より証拠隠滅には神経使ってますよ。現場を清掃していないわけがないです」

ああ、そうか。と納得した舞紀だったが、それ以上に説得力のある行動を起こしたのは警察二人でもない、被疑者二人の方だった。

「けど、友達ならどうして共犯になるんじゃないやなくて止めようとしなかったんですかね」

「友達じゃなかったとか」

「どういうことですか？」と訊く舞紀の声も聞かず、菅原はポスタ―を丸めながら踵を返し、行きましようか。と先を歩いた。舞紀が

そのあとをついて歩く。

人ごみの中、二人は事件と関係のない話をして、署へと向かった。

警視庁指定殺人事件容疑者

磯山ゆたか（23）

安藤静香（21）

## P a n d e m o n i u m

地獄帝国首都・ジユテツカの中心部に聳え立つ パンデモニウム  
の深層部は、歩いても延々と道が続く「氷結地獄」コキョトスと呼ばれ、明か  
りがなければ前に進むことも出来ない暗闇であり、未だ奥へと行っ  
た者はいないとも言われている果ての見えない洞窟で、高い天井か  
らは数メートルにも及ぶ氷柱が垂れ下がる極寒の地であった。

そこを、足音を立てて青白い光で足元を照らす懐中電灯を目の高  
さで持ちながら歩くのは、金髪碧眼、長身瘦躯でダークスーツを身  
にまとう人間の男の姿をした悪魔、ルキファージュと、サルガタナ  
スという悪魔だった。彼女もまた人間の女の姿をしており、華やか  
なワンピースを身にまとっている。二柱は人が見れば誰もが息を  
呑む美しい顔立ちをしているが、もっとも人間ではないが故のそれ  
だった。

この地に落とされた反逆者は寒さのあまり歯を鳴らすと言われて  
いるが、悪魔の二人は体温調節が出来るらしく、先の見えない気休  
め程度に照らされたその先を歩くのに寒さも恐怖も感じていなかっ  
た。

「それで、本気で言ってるのかしら。それは」

後ろを歩くサルガタナスがさっきまでルキファージュが説明して  
いたことについて疑問を抱くが、ルキファージュは「当然だ」と即  
答した。

「なんでそんな話になったの」

「話聞いてなかったのか」

ため息を吐くルキファージュは歩く速度を緩め、話を始めた。

先日行われた国会で内閣代表選が可決された。その候補者は現在、地獄帝国で最も地位のある帝国の王、ベルゼバブと、同等レベルの権力を持つ大公爵、アスタロトであるが、過半数の悪魔たちが「ルシファー」の名前を挙げたのだ。しかしルシファーはかつて犯したアドナイへの反逆で神罰を受け、現在はコキュートスで氷漬けの生涯を送っているのだ。それ故にルシファーは自分と同じように墮天使した悪魔たちのように動くことも出来ず、帝国のトップに立つことも許されない。

誰も近付かないその地で永遠と幽閉され、地獄帝国の当主という権限は形骸化していると言って良かった。

「別に王ベルゼバブに不満があるわけじゃない。器量も頭脳もトップに立つ者として兼ね備えてる。ただ、地獄を建国なさったのは他でもないルシファーだ。王が政権を握ってからの帝国は、下級悪魔たちの動きが制限されて随分落ち着いてる。それに不平不満を唱えている奴らが大方、ルシファーを支持してるってところだな」

話しながら一行に歩むことをやめないルキファージュを前に、サルガタナスは興味なさそうな相槌を打ち、「まあ、私は別に誰でもいいけど」と零した。だがルキファージュは、馬鹿言うんじゃないと声を尖らせる。

「公爵アスタロトも王もルシファーも皆、同じ考え方を持つてるわけじゃないのは知ってるだろ。公爵がトップに立てば帝国内で血が流れる。今の帝国があるのは一重に王の性質。おそらくルシファーが頂点に立

「つても、帝国は今の状態ではなくなる」

響いていた足音が、途端に止まった。ルキファージュが足を止めたのに気付कि、サルガタナスが同じように足を止めた。

二人が前にしているもの、それは青白いライトが照らす天井まで届く氷山の中に閉じ込められた地獄最高権力者大皇帝・ルシファアの姿だった。

墮天した際に「EL」の称号を失った彼は、熾天使セラフィムだった頃の美しさと気高さをも同時に失い、真っ黒な翼に包まれ、姿を隠して幽閉されていた。そこに偉大だった天使の面影はなく、罪人の証である醜い姿だけがそこにあつた。

ルキファージュとサルガタナスはルシファアが眠る氷山の前に立ち、姿を見ることが出来ないルシファアを眺めていた。

かつて最もアドナイを愛した天使だったはずの彼は、たかが人間を愛することを拒み、驕りを覚え、故にアドナイにクーデターを起こしてこのような姿になられた。それでも自分たちはルシファアについて墮天することを選び、この地に足を運んだ。

「どうして王も公爵も、ルシファアを放っておくのです」

サルガタナスが聞いた。ジャケットの内ポケットから取り出した煙草に火をつけたルキファージュは、さあな。と言葉を落とし、紫煙を吐きながら「大方、放っておいた方が二人にとって都合が良いんだろ」と、頂点に立つ者の水面下での争いを口にする。

「けどルシファアは王に国を任せることに不満を抱いてはいない。」

王だってそれについては自覚してるだろうし、今のマニフェストを  
実現したのもルシファアの思いあつてのもんだろう」

「じゃあ貴方は、何しにここに来たの」



## Pandemonium (後書き)

パンデモニウム……ミルトンの「失樂園」に登場する悪魔達の根城。

アドナイ……旧約聖書に出てくる神を表す文字を音訳した「ヤハウェ」の代わりにユダヤ教徒が用いる神への呼称。

(二) 柱……悪魔を数えるときに用いる助数詞。

## Lucifer

「じゃあ貴方は、何しにここに来たの」

その問いに、ルキファージュは嘲笑のように笑った。煙草を吸い、煙を吐く一連の動作をしたあと、未だ吸える煙草を足元に落とし、革靴でもみ消した。

「お前には悪いけど、俺は公爵も王も支持していない。六千六百六十六億の悪魔を配下に持ち、この国を担い、天界を破滅へと追い込むに相応しい者はルシファーだけだ。俺はルシファーを覚醒させ、皇帝の座を復活させる」

真剣な口吻で話すルキファージュにサルガタナスが口の端を上げる。「まあ、公爵がトップに立たれてごめんなのは同じだけど」と返した。公爵に仕えるサルガタナスは、もし上司が国のトップになったことを考え、仕事が増量することを懸念して次の代表選には王に投票するつもりだった。だがルシファーが目覚めるなら話は変わる。

自分だってルシファーについて墮天を選んだのだ。名の通り悪の所業を行う彼を見たくないわけがない。

「それで、どう覚醒させるの。あれじゃこっちの声すら聞こえてないわよ」

「俺を見誤るなよ」

そう言ってルキファージュは更に氷山に近付いた。手に持つ懐中

電灯をジャケットの内側にしまい、それから五本中、三本の指にシルバリングがついた利き手を氷の表面に当て、落ち着いた声で詠唱を始める。すると、まるで手品のように手が当たっている氷の内側に青白い光が上下縦に広がり、一瞬にして消えた。

途端、地響きが鳴り、辺りが地震のように揺れ動いた。地面にひびが入り、まるで生きているように地面に走る亀裂が広がる。何もかもが崩れ始め出して天井から砂埃が落ち、砂煙が上がる。更に氷塊にさえ亀裂が走った。サルガタナスが、出る？ と聞いたが、ルキファージュは、静かに。と制する。

数秒して間もなく揺れは弱くなり、地響きと動きが止まった。辺りを見回すと何事もなかったかのように静寂を取り戻している。変わったところといえば地面のひびと氷塊の亀裂くらいだ。

ルキファージュから舌打ちが漏れた。それに反応するよりも早く、爆音と共に氷山が崩壊した。爆風で粉碎した鋭利な破片が辺りに飛び散り、当たれば即死も免れないだろうが、既すんでのところではルキファージュが自分たちの手前にバリケードを張ったため、怪我はしなかった。

地面にへばりついた氷山の根元から出ている濃厚な白い煙が視界を遮断する。何が起きているのか把握する前にルキファージュはバリケードを解除し、サルガタナスに、行くぞ。と声を掛けた。サルガタナスは言われたとおりに後をついて歩く。

手を器用に動かすルキファージュは一瞬のうちに煙を、まるでモイセの十戒のように取り除いた。逃げるように薄れていく煙の中で見たのは、氷山があつた場所の壁が破壊され、外部の明かりが入り込んでコキュートスに光が生まれた光景だったが、反応するべきな

のはそこではなかった。

自分たちと同じように人間の姿で蹲っている人物がいた。背中に枯れたような漆黒の翼を背負い、艶のある亜麻色の髪、地面を掴む色白の手。

それを見たルキファージュとサルガタナスは足を止める。

「子供……？」

ルキファージュに名を呼ばれ、彼の前に出たサルガタナスは、足元で蹲っている子供の前にしゃがみ、その子供の両腋下に手を入れて子供を立ち上がらせた。

額に血が流れているが、透き通るような肌理の細かい色白の肌、通った鼻筋は、自分たちが信頼し、支え続けたかつてのルシフェルの顔立ちだった。随分と幼くなっているが、あの頃に見ていたルシフェルを子供にすると今見ているこの顔は安易に結びつく。

「ルシファアー？」

サルガタナスの声に、子供はゆっくりと閉じていた目を開いた。長い睫に囲まれた翡翠色の大きな目。ルシフェルそのものだった。

「アドナイは？」

子供らしい、高音の舌足らずな声だった。今の覚醒の衝撃で墮天した記憶を失ったのだろうか。今は未だ何も断定出来ない状態だといえる。

「サルガタナス」

「はい」

「ルシファーをトロメアに連れて行け。そのあとにパイモン、バテイン、ベルフェゴール、グーシオンにそこへ来るように連絡を入れる」

ルキファージュが指示を出した後、サルガタナスはルシファーを抱いたまま立ち上がり、分った。と、了承した。

未だ記憶も曖昧で、少なからず覚醒時に受けた傷も痛むのか、ルシファーの目は虚ろで、配下であるサルガタナスの細くて柔らかい肩にもたれ掛かり、シトラスの香水に包まれながら、それこそ子供のように眠りに落ちていった。

## R e s u r r e c t i o n

高級住宅が並ぶ上層居住区「トロメア」に鎮座する広大な敷地面積を誇る豪邸はスパニッシュ建築で、中にパティオがあった。足元は御影石で光沢があり、最上階の三階まで吹き抜けている。周辺には椰子が育っていてサイディングボードで出来たライラックの壁が映え、中心部には大理石で出来た円形の噴水があった。それを鑑賞出来る各位置に三つほど年季の入ったウッドベンチが置かれている。

白のカッターシャツの袖と黒のノータックスラックスの裾をまくり、長い脚の先は裸足という格好の上級悪魔の一柱、サタナキアは、四方に各々設置されたドアのうち、南側のドア付近に飾っている背の高い観葉植物の葉を、ゴム手袋を着用した手で持った雑巾と除菌スプレーで磨いていた。

「お前なにやってんの」

サタナキアが背にしている北側のドアから入ったルキファージユが呆れながら声を掛ける。彼が入ってきたことには気付いていたのか、サタナキアは振り向きはしないまま清掃しつつ、「ここ最近忙しかったから掃除サボって」と返した。聞いておきながらそれに対して等閑な返事をするルキファージユは噴水前のベンチに腰を掛ける。

「お前の潔癖症も病気だな。ルシファーが覚醒したっていうのに」

そう言ってルキファージユは胸ポケットから取り出したアークロイヤルにジッポークライターのライターで火をつけ、紫煙を吐いた。

「どうせお前が起こしたんだろ」

「昼寝の邪魔したみたいに言うなって」

「で、何か用か」

掃除の手を止め、やっと振り返ったサタナキアは傍においていたバケツを手に取り、噴水前に移動した。汚くなった水を足元にある小さな排水溝に流し、空になったバケツで綺麗な水を汲む。その一連の動作を見ていたルキファーは煙を吐きながら「未だ掃除すんのかよ」と面倒臭そうに小さく呟いた。

「ルシファーが目覚めたって意味が分からないのか」

「明日の代表選が出来レースになったただけの話だろ。それに、代表が王になるのが、公爵になるのがルシファーになるのが、何か俺らに影響が出るのか」

吐き捨てるように言ったサタナキアはバケツを持ち、その場を去った。何をするかと思えば壁に立てかけている新品のモップをバケツの水に浸し、床を掃除しているのだ。鏡のように映るものを反射しているが。

「面倒臭え性癖だな」

「お前が掃除しなさ過ぎなんだよ。バエルから聞いたぞ。上着も背広もカバンを部下のデスクに置いて自分はさっさとデスクに着くんだろ。ファッション雑誌の編集長かよ」

「俺はプラダなんか着なくても悪魔だがな」

声を尖らせて言うルキファージュは「てか、お前早く掃除終わらせろよ。落ち着いて話出来ねえだろ」と早口にまくし立てた。「知るかつ。掃除は俺の趣味なんだよ」とワケの分からない理由で一蹴されてしまったが。

「趣味でも仕事でもなんでも良いけど、ルシファーはそのうち動き出すぞ」

「動き出すって何をだ。下級に天界奇襲を指示して更に墮天使を増やすのか？ 崩れたパンデモニウムの深層部を再建するのか？ どつちにしても俺らには関係ないだろ」

「ルシファーがそんなことを考えるとと思うのか」

冷えた声にサタナキアは無言のまま反応し、モップを動かす手を止めた。

天界と絶縁状態にある帝国内は平和と言えずも閉鎖的だった。下級の悪魔たちは墮落し、気まぐれに人間たちを誘惑して日々を過ごし、中級は召喚されれば人間の前に現れ、普段は各々持ち場でルーティン化した仕事をこなしていた。そこあたりは上級である自分たちも変わらなかった。

「ルシファーが何を考えているか、総合司令官のお前なら分かるだろ」

短くなった煙草をルキファージュは後ろに投げ捨てた。音を立てて噴水に満ちる水の中に煙草が落ち、溶けるように跡形もなく消滅した。彼が言った「総合司令官」。ルシファーが目覚めぬ限り呼ば



れることはなかっただろう、サタナキアの肩書きだった。

「ミカエルと再戦でもするつもりなのか」

途端、ルキファージュの短い笑い声が聞こえる。

「ルシファーはおそらくアドナイもミカエルも恨んではいるだろうが憎んではない。最も、ルシファーが憎む相手は俺らも同じ」

それを聞き、ルキファージュがわざわざ自分のところに来た意味をサタナキアは理解した。ああ……。と声を落とし、つい口の端を上げる。

「人間か」

**R e s u r r e c t i o n (後書き)**

バエル……ルキファージュの部下である中級悪魔

## millions of deities

「人間か」

サタナキアの落とした声に、ルキファージュは頷いた。しかし、総司令官としても上からの命令が下されない限り、勝手に動くことは出来ない。止めていた掃除の手を動かし始め、何か策はあるんだろうな、と聞いた。

「先に下級悪魔、百九軍を人間界に送り込む。先に制圧すべきところはエルサレム。そのあとキリストの総本山、バチカン市国。それからUSAに渡り、UK、EU各国。ロシア全土に入る。そして東南アジアに入るわけだが……」

消え入るように声を抑えたルキファージュにサタナキアは手を止めた。そしてルキファージュが言いたいことを理解する。東南アジアになれば宗教は仏教が広まり、自分たち、悪魔の存在に対する概念がない。

「インド、スリランカは国民の半分以上が仏教だろうが、おそらく国外でパンデミックが起こるとくらいしか思わないだろ。対応は遅れる。後回しにしても問題はない」

「いや、そうじゃない」

サタナキアの見解を一蹴するルキファージュが言いたいののは「厄介なのは異教が根付いている国じゃない。宗教自体が根付いていない国民だ」と話した。それは極東の海に浮かぶ島国。

「日本か」

「あの国は出来れば近寄りたくないんだがな」

二本目の煙草に火をつけるルキファージュが言った。紫煙を吐き、サタナキアを呼ぶ。反応した彼に言った台詞は「小悪魔を知ってるか」と妙な疑問だった。

「こあくま？」サタナキアの眉間に皺が寄り、口の端が歪んだ。

「小さい悪魔で「小悪魔」だ。なんだと思う」

「リリムのことじゃないのか。体は小さいが悪魔だろ」

「そうじゃない。多くは若い娘のことをさすらしいが、どうも定義があるらしい」

「どんな」

「男を惑わし、翻弄する女のことだ。異性を誘惑するのはお前の専売特許だろ。その悪魔はお前のことを言ってるんじゃないのか、総司令官」

そう言ったルキファージュは明らかに面白がっていた。サタナキアから険しい表情は消えたが、迷惑そうに「俺は関係ないよ」と返した。

「それで、何が厄介なんだ。単に宗教が根付いていないだけで天使や悪魔の概念がないのは仏教国も同じだろ。後回しにしたって問題ない」

途端、ルキファージュは上体を屈め、まるで落ち込んだアスリートのように肩を落として溜め息をついた。なんだよ、とサタナキアの顔が引きつる。

「言っただろ。宗教が根付いていないのは国民。国自体には昔から伝わる宗教がある。それこそ、俺らには理解を超える考え方だ。概念がない」

またしてもサタナキアの眉間に皺が寄った。かつて自分たちが信仰し、崇めていたアドナイを超える宗教があるのか。顔を上げたルキファージュは一種異様の表情を持って答えた。

「八百万の神だ」

その声と共に空間が静まり返った。

長い一秒間が過ぎ、サタナキアが声を発したが、「なに言ってるだ、お前」とすっ呆けた台詞だった。

「そんなに神がいるなんてギリシャ神話かよ」

「日本神話知らないのか。天照大神。正月の三が日は伊勢神宮が若干テロみたいになってる」

「なんのこつちや」

中身のない話を溜め息をつくことで終わらしたサタナキアは、「それで、俺らはいっつ出勤命令が下されるんだ」と聞いた。

「下級が動き次第、おそらく エクスシアイが出勤する。上手くいけばこつちの中級を各国に動員し、それが済めば向こうも中級、それから上位三隊を派遣する。その頃には俺らはルシファーから出勤要請が来てるはずだ」

ルキファーージュは二本目の短くなった煙草の火を手でもみ消し、脚を組み替えた。サタナキアは依然とホウキを持ったまま。そして気付いたことがあった。

「それで、ルシファーはどうなってるんだ。まさか、目覚めた瞬間に血眼になって人間に報復するって言ったわけじゃないんだろ」

「いま寝てる」

世間話のような返した。寝てるっ？ と、つい声を上げてしまう。ルキファーージュはまた面白がったように「しかも子供の姿になっとな」と続けた。

「目を覚ました瞬間、アドナイを探した。姿からしてルシフェルの頃だろ。記憶としては墮、」

遮るように背広の内ポケットの携帯が鳴り響いた。ルキファーージュは慣れた手つきで携帯を取り出し、ディスプレイに浮かぶ名前を確認した。表示されている名は「リリス」。自分たちの代わりにルシファーの様子を見てくれているルシファーの妻だ。

「はい」

「目え、覚ましたわよ」

「様子は」

「あんたたちが出て行って直ぐに魔されていたわ。呼びに行こうかと思っただけど、下手に離れることも出来なくてね。しばらく様子見てたら、まるで化け物みたいに体が成長し始めて、今は墮天後の記憶を持ったルシファーよ」

「分かった。直ぐ向かう」

そう言っただけで電話を切ったルキファー。ジューは立ち上がり、サタナキアに「ジューテツカに向かう」と言った。サタナキアの反応が鈍る。

「ルシファーが目を覚ましたそうさ。寝てる間に体が戻って記憶も戻ったらしい」

「言っただけを言う気だ」

「何を、決まってるだろ。自分の立場を分からせるんだ」

足早にパーティオの西側の玄関を開けるルキファー。ジューはサタナキアが「立場だ？」と声を上げた。「そんなもん分からせてどうなる」と怒鳴り声に近い声で続けると、ルキファー。ジューは振り返り様に「明けの明星を閉じ込めて何になる」と尖った声を天井にまで響かせた。

「あいつは地獄帝国最高権力者。地獄の、大皇帝だ」

millions of deities (後書き)

リリム……リリスの娘。体が小さいと書いてありますが容姿についての記述は母親譲りの美しい顔立ちくらいしか残っていません。エクシア……天使軍中級三隊に属する階位。悪魔たちの奇襲に最前線を切って戦ったので墮天する天使が最も多い。明けの明星……金星。ルシファーは金星を神格化したものといわれています。



yes , my lord .

床は大理石で壁は黒一色の表面が鏡のように反射する御影石で出来ており、長方形型をしたアイボリーの洗面ボウルが四つ並んだ各々の間隔に紫色の透明な花瓶に造花の真つ赤な薔薇が飾られている。全体を照らす白熱灯の照明は明るく、清潔感漂うこの空間は単なる便所である。

オレンジ色の髪が特徴的な、上級悪魔であり地獄界の准将であるフルーレティが入ってきたところ、ちょうど（？）、小便用の便器の前でルキファージュが今まさに用を足そうとしているところだった。

「ルシファアのところ行つたんじゃないんですかあ？」

地獄界随一を誇る端麗な顔立ちとは違って少々アホっぽい話し方をするフルーレティがルキファージュの横に立った。ルキファージュは彼を見ずに少し上を見上げて「行つただけどいなかった」と答えた。

「リリスと一緒にいたって聞きましたけど」

「なんか少し目え離れた隙に出て行つたって。四十二階の窓から」

「化けもんかよ」

「悪魔だ」

自分の立場を忘れたのか、「あ、そうか」と納得するフルーレテ

イの背に今度は「二人仲良く連れションかよ」とネビロスの声が聞こえた。ダークスーツの二人とは違ってネビロスはシャツにジーンズと普段着だった。フルーレティの横に立つ。それぞれ忙しい上級悪魔の六柱の内、三柱が揃うというのは珍しいことだったが、場所が便所というだけあってあまりよろしくはない光景である。

「で、やっぱり地獄の代表ってルシファーになんの？」

ネビロスが言い、ルキファージュが首を傾げて「投票次第だけど、まあそうなるだろうな」と答え、間を開けることなく「今まで死票が三分の二を占めてたし、それは全部ルシファーの名前が記入されてた」と続けた。

「それに関してベルゼバブはなんて言ってたんだ」

ネビロスがフルーレティに聞いた。フルーレティはベルゼバブの配下であり、故に彼のみがベルゼバブのことを「バール・ゼブル」と呼び、首を傾げて眉間に皺を寄せた。

「何とも言えないけど、一応はルシファーについて墮天を選んだし、本望ではあるんじゃないの。っていうか、地獄のトップなんて今誰もやりたがらないじゃん」

「そっぴやアスタロトに俺に票を入れるなって言われたな」

アスタロトに仕える者として、何気なくそう言ったネビロスの耳にルキファージュの低い声が聞こえた。「そっぴやって任期終了があれば良いんだけどなあ……」と妙に語気に力が入っている。地獄が建国されたときから地獄帝国の宰相を担っている彼の愚痴と弱音である。

「頑張れ」二柱の乾いた声が響き、用を足し終えたらしくその場を離れ、手洗い場に向った。

「というか、なんでルキファージュはルシファー起こしたんだよ」

「バール・ゼブルに何か不満でもあるんですか」

「アスタロトも代表にならなくて済むって安心してるけどな」

「おかげでバール・ゼブルの十二指腸潰瘍も治るだろうけどな」

「てか小便長くねーか」

一気に二人が話すので理由を話す気が徐々に失われた。特に他意はなといえは嘘となる。地獄は王国でもない帝国。その頂点に君臨すべきは王や公爵ではなく皇帝が相応しい。ベルゼバブが統括する地獄は下級悪魔は惰眠を貪り、中級悪魔は召喚者のいる世界各国、地獄圏内を飛び回り、自分たち上級悪魔は三大権力者の元、部下に仕事を任せたり、解決策を求められている政治問題のため、寝る間も惜しんで働くことばかりが続いた。

均衡と秩序を守ると御託を並べ、ただ人間を見守る傍観者である天使との戦いに諦めを抱いている者など誰もいない。自分も、ネビロスもフルーレイも、そして一番はかつて最もアドナイを愛し、人を愛することを拒んだルシファーだ。

天使との戦いに敗れなければ、何度も悔やんだ。

「けどまあ、ルシファーを起こして何するか、大体予想ついてるけ

どな」

ネビロスが言った。やっと用を足し終えたルキファージュが洗面台の前に立ち、手を洗いながら「ただ人間界の均衡を破るだけじゃ済まないだろうがな」と口を挟んだ。

手洗いをすると、廊下を歩いてきたサタナキアと会った。彼もルシファーを探しているらしく、一緒に出来た三柱に「いたか」と声を掛けた。ルキファージュは両手を肩まで上げ、さっぱりだ、と口には出さずに態度で答える。

「どこ行っただ……」

焦る声色にネビロスが「何か心配なんすか？」と聞いた。あのルシファーがどこにしようが、それほど焦る必要はないという彼の考えだ。

「ルシファーの気配が全くしない」

「それが何か」とフルーレティ。

「ルシファーは目覚めたばかりなんだ。あんな氷塊の中、何億年も閉じ込められてたなら体が衰弱してても可笑しくない。覚醒したあと体が急激に成長したんだろ。魔力も何も感じ取れないなら、どこかで消滅した可能性もある」

誰も声を出さなかった。しばらく黙った後その可能性がないようにルキファージュが、「取り敢えず探そう」と提言し、この宮廷内を各自で探し回ることにした。

ネビロスとフルーレティが乗ったエレベーターは最上階へと向かい、ドアが開くと目の前には観音開きの扉が現れた。エレベータから降り、背にドアが閉まる音が聞こえる。ネビロスがサタナキアから預かった鍵をジーンズのポケットから取り出し、鍵穴に差し込むと、はまった音がした。

二人掛かりで開けたドアの先の会議室は、ベルゼバブ、アスタロト、上級悪魔六柱、ソロモン七十二柱の総勢、八十柱が入れるよう、最上階のフロアのほぼ全体を使っている。アンフィテートルムのように真ん中にステージがあり、演壇が供えられ、そこを要として円形に座席が一段ずつ上がっていく構造となっている。高さは二階分の吹き抜けとなり、誰も入っていない状態では随分広いように思えた。

「こんなに広がったっけ」

「八十の数も入れれば狭く思えるだろ」

ほとんど探す気のない二柱だった。ネビロスとしては「というか、ルシファーを起こして結局、何するつもりなんだ」とルキファージュの本位が見えてこないし、フルーレティも「まあ、何か考えはあるんだろ」と興味もないようだった。歩き回りながらも一応は探しているようだが。

「確かに人間も天使も気に入らないけど」

「それはルシファーも同じだってルキファージュなら言いそうだけどな。けどなんとなく、アスタロトもバール・ゼブルも帝国を本腰入れて統括しようと思ってないあたり、結局はルシファーが皇帝だって認めてるのかもしれないし」

「今さら、ルシファーが皇帝に就任して何すると思う」

「どうせミカエルに喧嘩売るんだろ、あと人間に対しても」

「そー。人間殺しちゃおっかなー、なーんて」

ルキファージュでもサタナキアでも、まして目の前にいるお互いではないマイクに通ったような声が聞こえ、その方向に振り返ると、赤、白、ターコイズのメッシュが入った金髪と真珠色の肌が特徴的な、睫の長い碧眼と近くで見れば寒気さえする整った顔立ちは健在である、ルシファーが会議室中央のステージにある演壇に座り、呑気な表情で二柱を見ていた。

「いつの間に……」

今まで気配もしなかった故、驚いて声が掠れた。

「結構前からいたんだけどなあ」

そのときだった、下の階を探し回っていたサタナキアとルキファージュが開いた扉から部屋に入り、何かを話し合っていたところ、演壇のルシファーに気付いて足を止めた。

「ルシファーか……？」

ルキファージュさえ驚きを隠せない声色だった。それに反し、彼に振り返ったルシファーは子供のようにただ笑い、「いたいた」と無邪気だった。

「お前、いつからそこにいたんだ」

「いつって、今。さっきまで一緒に便所いたんだけど、みーんな話に夢中で俺に全く気付いてないんだもん。ルキファージュのチンコ超でけえよな」

「どこ見とんねん」

「だからチン」

「もういい。たたみ掛けるな」

上級悪魔たちの顔が訝しげに淀んだ。あのルシフェルが墮天した以降、彼はルシファーとなって氷山に幽閉されており、今の今まで上級悪魔がルシファーとして話したことは一度もなかった為、熾天使として活躍していたルシフェルの頃に比べると呑気で頭の悪い話し方で、少し戸惑いがあった。まさかこれを解ってベルゼバブもアスタロトもルシファーを覚醒させなかったのかという考えすらよぎった。

鼻歌を口ずさむなんてルシフェルの頃じゃ考え難い。幽閉されていたくせに歌っているのが太川陽介の『L u i - L u i』なのが物凄く気になる。

「ルシファー」

彼に近付くルキファージュが呼んだ。なんだよ、とムツとした表情は子供が欲しいものを買ってもらえなかったときの、拗ねているような態度によく似ている。

「何故、リリスから離れた」

「俺が作った地獄を見て回りたくて」反抗的な物言いではあったが受け答えはしていた。しかしそのあとルシファアは独り笑い出し、馬鹿笑いを会議場に響かせた。演壇を叩き、むせ返るほどで気の毒にすら見える。

「なんだよ……」ルキファージュから当惑の色が消えない。

「だって俺が考えてた地獄じゃないんだもん。未だ人間だっているし、なんかルキファージュもサタナキアも大人っぽくなってさあ、俺どんなけ寝てたんだよ。ふざけんなよ。ミカエルは、ミカエル。あいつ取り敢えずぶっ殺して、人間も殺す」

「戦争でもするつもりか」

「そんなことしたらミカエルのアホがラ・ピュセルの娘を聖女に仕立てて英雄の誕生だろ。そういうの嫌いなんだよね。俺らのおかげで有名になれたのに感謝されるのはミカエルとガブリエルだしさあ」

座っている演壇から飛び降りたルシファアは演壇を前に立ち、マイクを持ったまま話を続けた。

「誰も天使に感謝しないように、天使が動く前に人間を制圧し、全世界を潰す。そのとき大天使が降りてきたら、解ってるよな」

それは、ルシファアとミカエルの再戦を指し、自分達が常日頃抱いていた天使に対する雪辱を晴らす為の戦いとなる。

上級悪魔たちの心配も杞憂だった。各々今立っている場から離れ、



ステージの前に集まり、ルシファアの前へ横並びに立ち尽くした。

人間達について、ルシファアの答えは一つだった。

「アブラハムの信者のみとは言わない。全人類対象だ。雨を降らしたくらいで人が考えを改めるわけがない。虹が掛かる前に世界を滅ぼす」

そのとき、ルキファージュが先に地面に跪いた。続けてサタナキア、ネビロス、フルーレティが跪いた。それは、主の命令を聞き入れ、彼に忠誠を誓うことを示した。

「全人類を殲滅し、ミカエル率いる天使軍を壊滅させる」

その指示に四柱は一呼吸置いた後、答えた。

「仰せのままに」

地獄帝国最高権力者ルシファアが、動き出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0153q/>

---

エメラルドの聖杯

2011年10月17日02時57分発行